

村上忠順翁顕彰会報



東海道五十三次 金谷 広重

★ 目次 ★

- 会長の言葉 - P.2
忠順先生の中にある強さと優しさ
石川 嘉仁
- 女性部研修会感想文 - P.3
「女性部研修会」に参加して 岡田 久子
「女性部研修会感想文」 田中 鈴子
- 歴史探訪感想文 - P.4
川留め文化を訪ねて (1) 小西 恭子
川留め文化を訪ねて (2) 細野 泰志
- 本居内遠添削『詠草』について - P.6
中澤 伸弘
- 令和6年度活動報告 - P.8
- 第19回「忠順大賞」 - P.9

村上忠順翁顕彰会報 第36号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局

発行 令和7年3月31日

忠順先生の中にある強さと優しさ



村上忠順翁顕彰会

会長 石川 嘉仁

日頃は当顕彰会活動に対しましてご理解・ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

三十五年目の節目となる令和六年度、会員の皆様からのご支援をいただき顕彰会活動ができたことに対し大変ありがたく思っています。令和四年度に村上忠順翁の偉業をPRし、更なる顕彰会活動の周知を図るために開設したホームページにおいて、奈良県にある天理大学図書館から「村上忠順叢書が読みたい」とリクエストがあり、叢書を寄贈したところ感謝の手紙をもらうなど、顕彰会活動に興味を持ってもらい広めていく活動に繋がっていると感じています。今後より多くの皆様に見ていただけるよう、顕彰会活動の充実と合わせて、魅力あ

るホームページとなるように頑張っていますので、是非一度検索してご覧いただきたいと思えます。

また、前林中学校の道徳の授業に講師として参加させていただき、一年生と三年生の皆さんに村上忠順翁の生き様や考え方を伝える活動も展開することができました。佐久間校長先生をはじめ関わっていただいた全ての先生方に感謝するとともに、今後継続して活動していき、生徒の皆さんに人生を歩んでいくうえで大切なことは何かを考えてもらうきっかけとなるようにしていきたいと考えております。

令和六年度の顕彰会活動も、忠順翁の『座右記』を読む全四回の四方樹大学や歴史探訪、女性部研修会、短歌募集の忠順大賞など多くの諸行事を開催することができました。今回の第十九回忠順大賞も前林中学校、堤小学校、駒場小学校や一般の方々から一四〇二首の応募をいただくことができました。親子・家族の絆を中心とした個性あふれる沢山の作品を応募頂き感謝しています。今回も家族団欒の何気ない幸せな時間や、お出かけした時に子供の視線で素直に感じ

たとても素晴らしい作品ばかりで、審査をする事務局にとっても作品者の温もりを感じることもできました。

世界を見渡すとウクライナ対ロシア、イスラエル対ハマス・イランとの戦争や、自国や個人主義的な考えが現代社会に蔓延していきそうな世相など、人に対する優しさや思いやりが少しでもあれば防ぐことができるような出来事が数多く存在しているのではないかと感じます。

故郷を大切に、家族や地域の方々日々想いを寄せながら生涯を貫き通した、忠順先生の優しさと強い信念の中に、現代社会が忘れてきている大切なものが存在していることは間違いありません。今後も繋がりが生まれ、思いやり溢れる地域となっていくように、忠順さんの教えを学んで・知って・伝え続けていく顕彰会活動を地道に積み重ねていきたいと思えますので、本顕彰会活動に対し今後とも一層のご支援を宜しくお願い致します。



女性部研修会感想文

「女性部研修会」に参加して

高岡町 岡田久子

「徳川美術館・徳川園」を訪ねると言う事で七月の暑い中四十数名の会員様と徳川美術館へ出発。車中で役員さんの説明を聞きながら現地到着。学芸員の説明を聞いた後、館内の見学に入りました。美術館と聞いたとき豊田市の美術館のようなイメージで入ったら大分違いました。ビックリ!!

展示室に入り「武家のシンボル武具・刀剣」「大名の数寄・茶の湯」「大名の室礼・書院飾り」「武家の式楽・能」「大名の雅・奥道具」「王朝の華・源氏物語絵巻」素晴らしい展示品の数々、心癒され優雅な気分になりました。能舞台の着物が「すごい刺繍」だと思ったら織物だったと知り、職人技に驚きました。

村上忠順翁顕彰会報 No.36

昼食は徳川美術館の敷地の一角にあり、尾張徳川家十四代目徳川慶勝公が揮毫した額から取られた由緒あるレストラン「宝善亭」で舌と目で味わいました。昼食後徳川園を散策した後ノリタケの森へ移動しました。

ノリタケミュージアムでは創業当時から第二次世界大戦終結までに作られた「オー

ルドノリタケ」や図案を色鮮やかに描いた「画帖」、そして今日までに作られたデザインウエアなどが展示してありました。これらの製品の誕生や多彩な技法、時代とともに移り変わるデザインなどについて紹介してありました。ノリタケの歴史を物語る名品の数々とともに楽しむことが出来ました。

最後に今日の旅の下調べ・資料作りなど御尽力いただきました事務局長の皆様ありがとうございました。

「女性部研修会感想文」

高岡町 田中鈴子

「村上さん」「村上さん」と名前は聞くのですが中々その方の功績等については詳しく知らず、どんな方だったのか知ることができるといい機会だと思いい参加させていただき

ました。徳川美術館・徳川園等、愛知県に居住し愛知県に居住していても何かのきっかけが



ないと中々訪れることが少ない場所ということも心動かされました。

厳かな建物を目にしてやや緊張しながら入室しました。徳川美術館・蓬左文庫徳川園等の説明を学芸員から受け、興味・関心がわき楽しみにしながら進みました。パンフレット片手では中々理解できない部分もありましたが、音声ガイド等を利用できた良かつたなと思えました。

武家のシンボルである武具・刀剣の展示から始まり名古屋城二之丸御殿にあった猿面茶室、能舞台が原寸で復元されていた。能で使用されていた衣装等もきれいに保存されて、色・形も素晴らしいものでした。

どの道具にも象眼(別の素材を嵌め込む)螺鈿(貝片を漆器や木地に嵌めたり貼ったりする)等凝った文様が施されており、素晴らしい作品を見ることができました。

又、衣装等は刺繍かと思う程の細かい織物の着物等手作りの卓越した技術の結晶が綺麗に保存されており、驚きを禁じえませんでした。

御霊屋改修記念の特別展として釈迦仏涅槃図もみることができ、大きさ・色の彩やかさに感心させられました。一つ一つの作品が、時代を越えてそのまま綺麗に保存され、私達に素晴らしい時と宝物を与えてくれました。

食事は、日本料理宝善亭でいただくことになり、見た目も綺麗に用意されておりおいしくいただきました。

その後、徳川園の散策は残念なことに暑さのため、花々もほとんど咲いておらず池の鯉も木々の陰に屯していた様です。一通り見てまわるが暑すぎてゆっくり見る事ができず、二〇十一年に国の有形文化財に登録された蘇山荘に、逃げ込むようにお茶をいただいた。そこは、日頃の喧噪を忘れてゆったりとした時間を過ごすことができました。

建中寺を車窓から眺めながらノリタケの森へ移動する。

ノリタケミュージアムでは創業当時から作られた「オールドノリタケ」や図案を描いた「画帖」、今日まで作られたダイナウエア等展示しており、私達の青春時代の作品だなと感じました。

一カ所・一カ所ゆっくり・じっくり見学できた良かつたなと思ひ、次の展示物の

パンフレットを頼りに又足を運びたいなと思ひながら帰ってきました。

暑い中、事務局の方々には大変ご苦勞をおかけしました、いろいろご配慮いただきありがとうございます。

歴史探訪感想文

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井川

川留め文化を訪ねて

本田町 小西恭子

豊田市の偉人・村上忠順は、御殿医として二年目、四十三歳の安政二年（一八五五）八月、刈谷藩主参勤交代のため、道中の付き添い医師として江戸までお供することとなった。

刈谷から江戸まで十日かかるところ、大井川で川留めとなり十五日かかっている。

このときの記録は忠順著『座右記』や『草分衣日記』に記されている。（旅の栞より）

大井川を一度訪問してみたいと



蓬 萊 橋

思い、回覧板でみた村上忠順翁顕彰会主催の歴史探訪に初めて参加した。豊田市に住んで早二十余年、「忠順大賞」や「忠順さん物語」など、子どもの持ち帰る配布物で村上忠順翁には馴染みがあり、高岡地区にある千巻舎や忠順翁の墓所も訪問

したことがあった。しかし、一番の決め手は、東海道でまだ訪れたことのない島田宿と大井川を間近で見えたからだ。

令和六年十一月二十六日、石川嘉仁会長の見送りを受け、農村環境改善センターを出発。矢作川を渡って、新東名で静岡県島田市へ。

最初の訪問地は大井川に架かる世界一長い木造橋「蓬萊橋」だ。この橋は、明治維新後に職を失った土族（徳川慶喜の親衛隊）らが牧ノ原台地を開墾したが、そこに通りやすいように明治十二年に架けられた橋である。前方に牧ノ原台地を眺め、早歩きで対岸へ渡った。渡るとき、大井川の川筋も間近に見えた。忠順翁が渡ったところとは違い現在には上流にダムも多くあり、川は遠目には浅く見えたが、蓬萊橋を渡って対岸の金谷側瀬は

深く流れも速かった。上手く場所を選びながら渡れば、安全に渡れるのだろうか。そんなことを考えた。

次に、KADODE OIGAWAで蒸し野菜などの美味しいランチをいただいた。ランチとともに大井川鉄道のSLが走るところも見ることができた。

島田市博物館では、川留め文化について学んだ。明治に入るまで、大井川には橋が架けられていなかった。

それは軍事的な意味合いがあったためといわれるが本当のところは分からない。洪水が起きやすかったからかもしれないし、川留めで島田宿や対岸の金谷宿が潤ったからかもしれない。

川越人足の賃金は、川の水位が帯下か帯上か、乳か脇かなど身体のだの位置かによって決められており、肩までいくと川留めとなった。最長の川留め日数は二十八日だったという。

学芸員の案内で、江戸



時代の堤防や川会所を見学した。島田市博物館は江戸時代大井川河川敷だった位置にあるようで、島田宿手前には江戸時代の堤防があった。旅人は川会所で川札を買い、川越人足に対岸まで運んでもらったそうだが、忠順翁ほどの蓮台にのったのかと皆で話しながら見学した。

大井川留めで金谷宿に五泊した忠順は、次のような和歌を残している。

いつしかとおもしろものを大井川

浅せになると聞ぞうれしき

この旅ではたくさんの出会いがあった。

旅の仲間、大井川、島田宿、そして村上忠順翁である。まずは、忠順翁の残した『座右記』『草分衣日記』から読んでみたい。

楽しい旅でした。ありがとうございました。

川留め文化を訪ねて

高岡町 細野泰志

令和六年十一月二十六日、今

回の村上忠順翁ゆかりの地を訪ねる歴史探訪の旅は、川留め文化を訪ねてとして、静岡県島田市博物館・川越遺跡そして蓬萊橋を訪ねる歴史探訪でした。

忠順翁と大井川の川留めとの関わりは、忠順著『座右記』によると、安政二年（一八五五年）八月のころ、忠順翁四十三歳の時で、御殿医になり二年目の時のことです。刈谷藩主参勤交代の為、江戸までの道中の付き添い医師として江戸に向かいました。通常であれば十日くらいで江戸に着くとされていましたが、参勤交代の一行は天候により大井川で川留めにあつて十五日間で江戸に着いたとされています。

江戸にはそこに詰めている医者があり、三日間の休暇を得て、刈谷に帰るのが通常でしたが、忠順翁は十日間の江戸への滞在を許され、殿様との交流、文学活動等などの出来事を『草分衣日記』に記されています。

『草分衣日記』では、八月に参勤交代のお供として江戸へ行ったと記されています。これは江戸への行き帰りにあつた出来事を記した紀行記録で沢山の和歌も詠われています。参勤交代のお供の話は、大井川で川留めにあつたこと、また江戸で経験したことなど人間味あふれる忠順翁の姿に接する

ことができる日記となつてゐるとのことです。

さて、『座右記』により八月十八日の暁、午前二時頃刈谷を立ち江戸へ向かいます。二十一日に遠江国最東端の金谷宿へ到着しました。大井川の洪水により川留めとなり二十一日から二十五日まで留まっています。二十六日に金谷宿を立ち、江戸へ向かい九月二日に江戸赤坂にある刈谷藩上屋敷に到着したと『座右記』に記されているということです。

『草分衣日記』には、この川留め中の金谷宿での様子が記載されています。

「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」とうたわれる様に、大井川は水嵩により川留めがあり通行は一時中断されました。参勤交代を含め東海道を多くの人々が往来し川留めにより、その前後の宿場町は大変な賑わいになり、川留め文化として島田宿は大変な賑わいをみせました。

村上忠順翁ゆかりの地の島田市博物館・川越遺跡で、当時の移動の大変さと厳しさを感じ、現在の便利さを構築してください。先人たちのご尽力に感謝する思いです。そして、社会経済の発展、また交通の発展に合わせて様々な文化もその地にあった発展を遂げていると感じます。

また、最初に、大井川に架けられた歩行者と自転車専用の木造の蓬莱橋を訪れました。

江戸時代、大井川は架橋・渡船が禁止され川越人足の肩車や蓮台で渡河するしかありませんでした。明治二年（一八六九年）に旧幕臣が開墾方として谷口原に入植し、以来島田宿に渡る人が増えました。この頃は、小さな渡船を利用していました。河川の増水により欠航などが多く不便な状態でした。島田宿の開墾人たちは、静岡県から許可を受け農業用の橋として明治十二年（一八七九年）に完成し、開墾地と島田宿を結ぶ交通の要所として活用されてきました。蓬莱橋は、大井川に架けられた897.4mの世界一長い木造歩道橋で、平成九年（一九九七年）に世界一長い木造橋としてギネスブックに認定されています。こちらにも、大井川の周辺の産業と交通形態の変遷の一つとして貴重な資源であると感じます。宿場町の街並み・博物館・橋そして昼食場所等どれも素晴らしく、感動する歴史探訪でした。

終わりに、歴史探訪を企画し運営していただいた村上忠順翁顕彰会の皆様に敬意を表するとともに厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

本居内遠添削「詠草」について

中澤伸弘

村上忠順は師事してゐた橘守部の歿（嘉永二年）後、その年内に本居内遠に入門した。内遠は紀州本居家の三代目であり、宣長の養嗣子大平のまた養子である。宣長とは血のつながりはないがその学統を継承した。明治時代に学者として高名な本居豊穎は内遠の実子である。

忠順が内遠に入門したことはその門人録に名があり、また村上家に残る数通の書簡からもわかる。ただ内遠はこのあと安政二年に歿したので、師事した期間は六年程と短い。ここでは村上家に残る内遠添削の忠順の詠草を紹介し、その歌の指導の一端を明らかにしたい。

詠草は『村上忠順家所蔵図書目録』一〇五一・詠草と題するもの。仮綴一冊、表題は「詠草 忠順」と打付書きあり、忠順自筆。歌は一丁に五首。忠順専用の「村上氏蔵版」の罫紙の一丁初めに「本居内遠翁添削 忠順 三河荻谷藩村上承卿」とある。

ここでは紙数の関係で冒頭十丁、五十首をとりあげてみる。そのうち幾か所に内遠の加筆訂正がある(翻刻では行書体にした)。興味深いことはその添削に対して数か所に忠順の所感が書き加へられてゐるものがあることである(今回の翻刻では※印をつけた)。その中から幾つか、その実際を次にあげる。なほ忠順の文字の判読できないものは□とした。

〈内遠の評に対し、忠順の意見が書かれた歌〉

若菜 おのれも是に似たるうたを

光年よめり

朝鳥のあさなるかたをしるべにて雪まの若なつまむとぞ思ふ

※雪中若菜 内遠いつかたに若菜尋ねむ

朝鳥のあさなるかたや雪まなるべし

○忠順の若菜の歌に対し、内遠は自分もこのやうな歌を先年詠んだことがある、と書いたが、忠順はその歌を見出し、欄外に書きつけた。この歌は加納諸平が編んだ『類題和歌鮭玉集』四編に雪中若菜と題して内遠が詠んだもので、忠順の知るところであった。忠順

はこの歌を意識したのか本歌取りの体である。

泉 山しみづといふ語 物遠くきこつか

ぬこちす 古く例ありやいかゞ

□なやむそばのかけひの山し水やま
ずむすべば涼しかりけり

※山清水 万葉ニアリ

○内遠は、泉の歌の「山清水」といふ詠み方は、あまり聞かない語であると指摘。それに対して忠順は「万葉にあり」と書く。忠順の見識のうかがへるものである。

樹陰納涼 松うゑてナドヤ

昔たれ此岡にしも春眼まきて我すむむ
べきかげとなしけむ

※万葉七 詠岳 片岡之此向峯椎時者今年

夏之陰尔将比疑 コノ哥ヲ本哥ニテヨ

メルナレバならト云フナデフカアラム

椎ハナラ也

○この歌の「ならまで」と言ふ語に、内遠は「松うゑて」と訂したのを、萬葉集に「ならまきて」とある歌を参考にしたものだ、その歌を引用して自分の歌が間違つてゐないことを示して

ゐる。

〈内遠の評のある歌〉

試筆 初句猶いひさまあるべし

筆とるとみづからくみし山の井の浅き
心を書なかしける

カナニカクベシ

○初句の「筆とると」は別の語があるだらう、「書なかしける」は平仮名書きがよいという。

名所夕立 さちまふしも見えす

花園山もはたらきうすし

細川の水かさまさとみるがうちに夕
立はるゝ花園の山

初秋風 詞からよし

こなぎつむあこめが袖にふきぬなり田
中の井戸の秋の初風

落葉 紅葉とかきてもみぢ葉とよむこ

とハ哥におきてハ害なけれど かくて
はもみぢとかく時に同じくハ差別
なし □なに定めんハ亡祖父のいひし
ごとくもみぢ葉とかむにハしかず

身におはぬ錦なりけりつま木こる賤が

令和六年度活動報告

しもとにちれる紅葉

○題の「紅葉」の読みは「もみぢ葉」か「もみぢ」か何れも読めるので、祖父宣長の言つたやうにこの場合は「もみぢ葉」と書くのがよい、といふ。

雪點林題見有花 題にやゝ異なるさ

ま有べき也 ととのへずとハあらね

バ点あへれど かくて奉待句と同

じくて うたによめるせんなし

時のまに花の林となりにけり松のうは葉につもる白雪

○歌の題にそぐはない歌であると指摘してゐるがその言はんとすることがわからない。

年内立春 よく聞ゆ

年のうちに春たちにけりさほ姫もけふは衣のきぬくばりせよ

晩帰 四句てにをはなくてかく窮屈

に聞ゆ

いざさらバわれもいそがむくれぬとていへ鳩かへるたそがれの

○四句の「いへ鳩かへる」にテニヲハがないので窮屈だとする。鳩が自分の

棲家へ帰るのだが、これでは家で飼ふ

鳩になつてしまふことをいふのだらう。

「いへ二鳩かへる」としたいのだらう。

〈内遠の添削のある歌〉

十月ばかり陸宮御方江戸へ下らせ給

ふと見奉りて

みやこ人^{けふ}むれ行袖のあけみどり ^{冬も} 大路

ハ来^も錦なりけり

寄草述懐

くりかへしよみミしふみ^もわすれ艸し

げるにしげる身をいかにせむ

○これは語句の添削である。ここに言

ふ「陸宮御方」とは誰であらうか。

以上本居内遠添削の「詠草」から幾つかの歌を紹介し、その実際を紹介した。内遠は会うたこともない門人であつても当時は丁寧に通信教育を施したが、忠順はその指導を受ける一方で自分の考へについてはその根拠を示してゐる点は興味深い。

○五月二十六日(日)

定例総会 出席者一〇〇名

*「第十八回忠順大賞」入賞者二十名

表彰式並びに講評

作品講評

久米翠雲先生



表彰式表



○六月二十一日(金)

第一回役員会

出席者二十四名

*顕彰会発足経緯について

*五年度事業・予算計画

*会費徴収について

○七月十八日(木)

女性部研修会 参加者三十八名

*徳川美術館・徳川園を訪ねる

特別展「尾張徳川家と菩提寺建中寺」

「建中寺」車窓見学を経ながら

「ノリタケの森」見学

*昼食「宝善亭」にて

○八月二日・九月六日・十月四日・十一月一日（各月第一金曜日）

四方樹大学 受講者延べ七十名

★講師 名古屋大学名誉教授 塩村 耕先生

★講義 忠順翁の公用日記『座右記』の読み解き

四方樹大学 塩村先生



○十一月二十三日(祝日)

第二回役員会実施 出席者二十四名

★村上忠順翁墓参・千巻の舎碑と建物見学

★ビデオ「刻の遺産(村上忠順)」視聴

★顕彰会活動報告と意見交換

○十一月二十三日(令和七年一月三十一日)

★「第十九回忠順大賞」募集

★発表二月末日 応募総数一四〇二首

撰者 久米翠雲先生

詳細は別紙参照

○十一月二十六日(火)

歴史探訪 参加者 四十一名

川留め文化を訪ねて

忠順翁も「参勤交代」のおり大井川の

川留めで金谷宿において五日間の逗留。

★見学「島田市博物館・分館」学芸員の

説明を受けながら川越遺跡見学。

★「蓬萊橋」見学

★食事 KADODEE OIGAWAにて

⇐昼食風景



⇨前中道徳時間

○十二月九日(二十日) 前林中学校

一年、三年の各クラスの道徳の時間内

において、忠順翁の紹介と、活動の目

的なども紹介させていただいた。

第十九回「忠順大賞」

○小学生の部

豊田市長賞

駒場小学校六年

手島 華菜

三味線を教えてもらった 水曜日

私の手から舞い上がる花

※水曜日に三味線を習っている。

「さくら」の曲が弾けるようになった。その感動が伝わってきた。下の句が新鮮に感じる。

豊田市議会議長賞

堤小学校一年

尾園 小茉

おもちつき手がえしたら あっかった

あとつぎできたと おおばあよろこぶ

※餅つきを、家族全員で行った。私は初めて、手返しをした。楽しかった。おおばあちゃんが大喜び。美味しかったかな。

豊田市教育委員会賞

堤小学校四年

山崎 颯大

お正月みんなでかるたもりありがた

気づけば大人がしんけんしようぶ

※いとこや家族全員でカルタをした。にこにこ、わいわい。気がつくくと大人達が真剣になって楽しんでる。颯大君の見る目がいい。

中日新聞社賞

堤小学校二年 池谷 杏南

まよいなし はじめてならう生花で

じゆうに切りさし 赤白みどり

※生花を習い始めた。師匠さんから、自由にと
われ、迷いなく鋏を入れて、さしていった。短
歌も態度も、さっぱりして素晴らしい。

会長賞 金賞

堤小学校一年 清水 結月

なるとき「グニッ」のうえでとびはねて

ママの「うるわさ」で一日おわる

※一日中、寝るまで元氣。ママの声が合図。おや
すみ。いいね！

○中学・一般の部

豊田市長賞

駒場町 古賀 さやか

くつ下と肌着に母の名を刺繍

子供の頃と逆だね母さん

※幼稚園やこども園、小学校入学時に、着る物は
もちろん、セツト類の一つ一つに名前を書いた。
感謝しながら、施設に通う母に名前の刺繍をし
ている。五句に万感。

豊田市議会議長賞

前林中学校三年 加藤 一期

見上げてた優しい親のあの顔も

いまじゃ頭のつむじが見える

※父親は大きく偉大であると思いつけてきた。ふ
と並んでみると、自分の方が背丈は高い。いつ
の間にか、父の頭の頂上は髪の毛が薄くなって
いる長生きしてほしい。

豊田市教育委員会賞

前林中学校一年 新美 友那

魅力的なチアリーディング

華やかな演技の裏に努力と涙

※入部してまだ日も浅いが、チアリーディング好
きだ。ひたすら踊りの練習をする。大会当日、
他のチームの演技をみて、汗や涙の決勝だと感
じた。下の句が良いね！

中日新聞社賞

前林中学校一年 原田 小愛

口ずさむ同じ曲を突然に

友と目が合い大爆笑

※放課時間だろうか、それとも下校時間だろうか。
小声でお互い歌いだした。同時だっただろう。同
じ曲だった。おもわず大爆笑。学園物語の一コマ
ですね。楽しい。

会長賞 金賞

駒場町 清水 雅弘

南吉の生家を孫と訪ねたら

切ないゴンの優しさを知る

※「ごんぎつね」のゴン。お孫さんも印象深かつ
たと思う。下の句いいです！南吉の特徴がよく表
れた作品。

入賞者・無審査作品詳細は別紙にて掲載

あとがき

当顕彰会の行事で会員の楽しみは、
女性部研修会と歴史探訪である。歴史
探訪では村上忠順翁にゆかりのある地
を訪ね、現地学芸員の説明を聞き、又
展示品・説明書き・ジオラマ・リーフ
レット等に触れながら江戸時代の具体
的な姿を想像する事も楽しいものです。
刈谷藩堤村を拠点に東海道東方面が
二年連続となりました。歴史探訪さら
に東へ東へと進めば、いつかは江戸へ
たどり着けると思うとワクワクしてく
きます。実現出来るかな。

寺田俊一